

タイトル

ゴージャスお宝鑑定家〜「う〜ん、ゴージャス〜」21

登場人物

- ・ 剛田（ごうだ）… 剛田質店の店主で鑑定士。ゴージャスなものしか興味がなく、全てにおいて優雅であることを追求する男。口癖は「ゴージャス！」。
- ・ 白金（しろがね）… 剛田質店の見習い鑑定士。一般的な価値観を持つ常識人で、剛田の振る舞いや発言に毎回困惑する。
- ・ 客・藤原（ふじわら）… 翡翠製卓球ラケットを持ち込む謎の男。気弱だが、家族のためにお宝を手放そうとする背景を持つ。

- ・ナレーション：物語の進行を補助する役割。

あらすじ

「ゴージャスな品物しか扱わない」という独自の美学を貫く剛田質店。ある日、見習い鑑定士の白金が接客していると、藤原という男が翡翠でできた卓球ラケットを持ち込む。剛田はラケットのゴージャスさに目を輝かせるが、その実用性や真偽を巡って店内は大混乱に陥る。果たして剛田はこのお宝を買い取るのか、それとも拒否するのか？

シーン：剛田質店の朝

舞台設定：剛田質店の店内。豪華なシャンデリアが輝き、壁には金縁の額縁に入った絵画が掛かっている。

ナレーション：ここは剛田質店。ゴージャスなものしか扱わないという独特のルールのもと、日々珍品が集まる店である。

（白金が掃除をしながら独り言）

白金：（ぼやきながら）本当に変わったお店だよなあ。普通の質店ならテレビとか時計とかが並んでるけど、ここはダイヤの靴べらだの、純金の将棋駒だの…。剛田さんのセンス、ちよつとズれてるよね。

（奥の部屋から剛田が登場。紫のシルクのローブを着て、手には金のステッキ。）

剛田：（朗々と）白金くん！今日も店は輝いているかな？

白金：（苦笑い）おはようございます、剛田さん。ええ、輝きすぎて目が痛いくらいです。

剛田：素晴らしい！ゴージャスな朝にふさわしい言葉だ。だが、白金くん…（指を上げて

止める）掃除の仕方が平凡だよ。もっと優雅に、たとえば……こうだ！（ほうきを持ち、舞うように掃除をする）

白金…（呆れ顔）それ、掃除っていうよりダンスですよ。

剛田… ゴージャスたるもの、掃除ひとつにも美を追求せねばならん！

白金…（ぼそっと）それなら誰か他の人に任せた方が早い気がするけど。

剛田… 何か言ったかね？

白金…（慌てて）いえ、何も！

シーン2：謎の客・藤原登場

（店の入り口のベルが鳴り、藤原が入ってくる。小さな包みを持っている。）

白金… いらっしやいませ！ 剛田質店へようこそ。

藤原… あ、あの…これ、見てもらえますか？

（包みを差し出す）

白金…（慎重に包みを受け取りながら）なんだろう、これ。

剛田…（近寄ってくる）おやおや…この香り

…！ゴージャスの予感だ！

（白金が包みを開けると、中には翡翠製の卓球ラケットが入っている。）

白金…：卓球ラケット？翡翠でできてる？

剛田…（目を輝かせて）うーん、ゴージャス！

藤原… これ、家に代々伝わる品なんですけど、どうしてもお金が必要で…。家族のために手放すしかなくて。

白金…（困惑）代々伝わる品が卓球ラケット？

剛田… 黙りたまえ、白金くん！ゴージャスの前に歴史は霞むものだ。

藤原…（不安そうに）これ、買い取ってもらえますか？

剛田… もちろんだとも…ただし！まずは鑑定だ。これが真にゴージャスたる品かどうか、我が目で確かめねばならん！

白金…（ぼそと）なんか鑑定基準が独特すぎるんだよなあ。

シーン②…鑑定開始

（剛田がラケットを優雅に持ち上げ、じっくり観察する。）

剛田…（独り言のように）翡翠の色艶、握りの造形…これぞ美の極致！だが、まだまだ。最後のテストが残っている。

白金…（疑問）最後のテストって何ですか？

剛田…（真顔で）実際に卓球を試してみることだ。

白金&藤原…（声を揃えて）えっ！？

剛田… ゴージャスたるもの、機能美をも兼ね備えていなければならない。さあ、白金くん、ラリーを始めるぞ！

白金…（慌てて）ちょっと待ってください！翡翠って割れやすいんじゃないんですか！？

剛田… それがどうした！割れるならそれまでの品ということだ。ゴージャスたるもの、常に試練に耐えなければならんのだよ。

（剛田と白金が卓球を始める。ラケットを振るたびに、球の軌道が緑色に輝き、幻想的な光景が広がる。）

白金…（目を丸くして）なんだこれ…球の軌道が光ってる！？

剛田…（誇らしげに）これが翡翠の魔力だ！ラケットが持つゴージャスオーラが球に宿るのだよ！

藤原…（驚きつつ）そんなことが…。でも、本当に割れないんですか？

剛田…（ラケットを掲げ）この品、割れるものなら割れてみる！これぞゴージャスの真髄！

（ラリーが続き、ラケットが激しく揺れるたびに店内は大混乱。最後に剛田が満足げにラケットを置く。）

剛田…見事だ。これぞ究極のゴージャスだ。

シーン４：藤原の背景

（藤原が感慨深げに語り始める。）

藤原…（小声で）実は、このラケットは父が愛用していたものなんです。家族のために必死で働いていた父が唯一、趣味にしていた卓球。それがこの翡翠のラケットでした。でも、家族を支えるために手放さなきゃいけないくて…。

白金…（優しい表情で）そうだったんですね…。

剛田…（しんみりしつつも気丈に）藤原さん、その思い出があるからこそ、このラケットは輝きを増しているのです。まさにゴージャスな逸品だ。

シーン５：査定金額発表

（剛田が厳かに椅子に座り、考え込む。）

剛田… さて、藤原さん。この翡翠の卓球ラケットの価値を…今、ここに定めましょう。

白金… (小声で)いくらになるんだろう…。

剛田… (堂々と)300万円！

藤原… (驚きながら)そ、そんなに！？

剛田… (優雅に)ゴージャスなものには、それにふさわしい価値がある。それだけの価値が、このラケットには宿っているのです。

白金… (ぼそっと)剛田さんの基準、やっぱりぶっ飛んでるよな…。でも…(笑顔を浮かべ)納得できる気もします。

(ラケットを買い取った後、藤原が感謝しつつ店を去る。店内には再び剛田の優雅な声が響く。)

剛田… 今日もまた、一つのゴージャスが救われた。さあ、白金くん、次のお宝に備えようではないか！

白金… (苦笑い) 剛田さんのペースについてくのも、なかなか大変です。

ナレーション… こうして剛田質店には、また新たなゴージャスが舞い込むのであった。

幕